

平成26年度 幼児教育学科

自己点検・評価報告書

目 次

	ページ
1. 概要	1
2. 教務	3
3. 保育実習・教育実習	6
① 保育実習Ⅰ－1	6
② 保育実習Ⅰ－2	7
③ 保育実習指導Ⅰ	8
④ 保育実習Ⅱ・保育実習指導Ⅱ	9
⑤ 保育実習Ⅲ・保育実習指導Ⅲ	10
⑥ 教育実習Ⅰ	11
⑦ 教育実習Ⅱ	12
⑧ 教育実習指導	13
⑨ 保育実習連絡協議会	14
⑩ 自主実習	15
4. 総合演習	16
5. 保育・教職実践演習	17
6. 学生指導	18
7. 幼児教育センター活動	19

平成27年3月

富山短期大学 幼児教育学科

1 概要

担当【学科長 宮田】

1. 平成 26 年度自己点検・評価項目およびメンバー

自己点検・評価項目	メンバー
1 教務	
2 保育実習・教育実習	宮田 徹 石動 瑞代 小芝 隆
3 総合演習	望月 健一 飯田 聡 赤川 雅和
4 保育・教職実践演習	橋本 麻里 中山 里美 難波 純子
5 学生指導	梅本 恵
6 幼児教育センター活動	

2. 平成 26 年度自己点検・評価の概要

本学科では平成 12 年度から毎年、活動全般について、学科教員全員による自己点検・評価を実施している。本報告書は、それぞれの項目について科内分掌上の担当者を中心に整理した実績と問題点を科内会議で協議し、現状を総括するとともに、次年度に向けての課題とさらなる改善・向上のための行動について検討した結果を取りまとめたものである。その概要は、次に示すとおりである。

(1) 教務

平成 26 年度は、全学的には、国の大学教育再生加速プログラム（AP）に採択される等、平成 24 年度からの教育改革の動きが一段と本格化した年であった。本学科においても、Web シラバスの運用を開始し、今後は、その利活用も含め、学修成果の向上につながるような授業内容・方法の改善を図っていく必要がある。学習環境の保障としては、プロジェクトの修理・交換、講義室のイス交換など必要な環境整備を実施した。27 年度は大幅な学生数の増加が見込まれることから、ハード・ソフト両面での環境向上に一層の努力が必要である。全学的な取組として第二クールの第三者評価を受審し、適格認定を受けたことに加えて、文部科学省の課程認定等大学実地視察を受け、幼稚園教諭養成課程の点検・改善に取り組んだ。

(2) 保育実習・教育実習

実習指導科目（保育実習Ⅰ、保育実習Ⅱ・Ⅲ、教育実習Ⅰ、教育実習Ⅱ）間の授業内容調整と担当者の協働により、事前・事後指導の充実を図った。今後も、科目間の有機的連携が重要課題である。個別的な配慮が求められる実習学生については、実習先との連絡調整や学内の情報共有・連携の一層の充実・強化が必要である。県内養成校の増加、少子化と幼稚園等の減少などにより、他校との連携・調整及び受け入れ先の確保が大きな課題となっている。

(3) 保育・教職実践演習

学生の主体的な参加を促すために、具体的な課題設定や日程の配慮等を行ったが、さらなる工夫が必要である。レポート中心の評価方法についても検討を続ける必要がある。履修カルテとの関連付けをより明確化するなど、さらなる活用を検討していきたい。

(4) 学生指導

個別指導を必要とする学生や指導に費やす時間の増加に伴い、より一層の教員間の連携・情報共有が必要である。27年度の学生数増加に学科全体で対応する必要がある。

(5) 幼児教育センター活動

県内外の幼稚園・保育所等の関係者と保育者養成校の教員、学生が一堂に会し、研究と実践を交流・推進する場として、第42回幼児教育研究会を「保育内容を見つめ直す一子育て支援と保育内容」を研究主題として開催した。今後とも、地域と密接につながった研究や社会貢献の取組をより充実させることが求められる。

2 教務

担当 [石動・飯田]

1. 現状

(1) 平成 26 年度の課題への取り組みについて

① Web シラバスの運用

Web シラバス導入初年度であったが、各教科目の到達目標や到達目標別評価基準、講義及び予習・復習内容等を明示し、学生が各自のスマホ等で自由に確認するという基本機能はスムーズに運用された。授業資料の添付や学生の課題提出等に利用されるなど、次第に活用の幅も広がってきており、FD 研修等の機会を活用しさらなる充実に努めているところである。

② 学生への情報提供と履修内容に関する意識の向上

履修登録時や履修カルテ作成などの機会を有効に利用し、学生の履修内容への意識を高め、自ら学ぶ姿勢を醸成していくことに取り組んだ。少しずつ意識の高まりは見られるものの、履修登録のミスや既修得科目申請の遅れなどがわずかにみられた。また、履修カルテの記入が不十分なものも散見されるなど、さらなる取り組みの必要性が感じられる。

③ 学習環境の保障

F 館教室の使用頻度が増え、E 館・F 館を中心とした講義・演習がほぼスムーズに展開された。プロジェクタの修理・交換、講義室のイス交換など、必要な環境整備も行われた。

今年度も座席表を作成し (H17~)、年間 4 回の座席替えを実施した。出席番号を基本に作成しているが、配慮を要する学生については柔軟な対応を行った。一方で、固定的なメンバーでの学習環境になりがちである点は、個々の授業担当者の工夫 (グループ編成を変えるなど) に依存している面も多く、さらなる対応が望まれる。

④ 入学年度の異なる学生への対応

平成 26 年度は、前年度に卒業単位が未取得であった学生 (1 名) が 2 年生に在籍したが、前期末までに単位取得を終え、9 月 30 日付の卒業となった。年度内に、休学・退学及び留年となった学生はいなかった。

(2) 教員免許更新講習への対応

平成 26 年度の「教員免許更新講習」では、「選択科目」(18 時間) を開講した。実施日は 8 月 26 日 (水) ~28 日 (金) の 3 日間、受講者数は 46 名であった。今年度は、子ども子育て支援新制度実施に伴う幼保連携型認定こども園への移行等を考慮してか、保育所からの受講者が増加した。

(3) 教育課程懇談会の実施

① 学生と教員による教育課程懇談会

2 年間の学びを通して感じた率直な意見を学生から聞くことを目的に実施し、第 12 回目の今年度は 12 月 24 日 (水) に、2 年生 19 名、学科教員 10 名の計 29 名で、教育課程、実習、学校行事等について懇談した。

② 教育課程懇談会

本学科の教育課程に携わる非常勤講師・兼任教員との教育課程懇談会を3月1日（金）に実施した。2名の非常勤講師と1名の兼任教員及び、学科教員10名が参加し、教育課程の実施状況について懇談を行う中で、本学科の教育課程や学びの特性について確認が行われた。欠席した一部の講師からは、学生の授業態度が概ね良好であることが文書で伝えられた。

（4）学生間の交流支援（学生相互の学習体験や実習体験の交流）

今年度も、引き続き、学習や実習の体験を語り合う、交流支援を行った。

- ・学外研修での交流会の実施。
- ・HR等の機会を利用した、2年生から1年生への実習連絡・報告会の実施。
- ・講義を利用した交流支援（「保育者論（2年）」で1年生向け「実習ハンドブック」を作成・配付。「保育の心理学Ⅱ（1年）」「保育者論（2年）」の合同授業で、2年生が臨床心理学の授業で取り組んだ「ロールプレイング」を実施。）。
- ・「総合演習発表会」「卒業演奏会」「運動会」への1年生の参加。

（5）科目横断的授業実施の取組み

昨年度まで音楽Ⅱ（オペレッタ）を履修した学生のみで取り組んでいた「オペレッタの制作・公演活動」を、保育内容（言葉Ⅰ）や図画工作Ⅱ-2等の教科目の内容として一部取り入れ、2学年全員の学生及び教員が協働する中で実施した。その他、実習指導や保育内容の表現系科目においても科目横断的な授業を実施し、教育効果や教員間の協働性を高める取組みを行った。

（6）文部科学省「平成26年度教職課程認定等大学実地視察」の実施

平成26年12月10日（水）、実地視察委員2名及び文部科学省職員2名による実地視察が、富山国際大学と本学を対象に実施された。特に改善報告等は求められなかったが、教育職員免許法施行規程第6条第1項表で定める「含めることが必要な事項」がシラバスに十分反映されていない点等の一部指摘を受け、速やかに必要な修正を行った。

（7）「自己点検表」による学科の自己点検について

厚生労働省東海北陸地方厚生局が、「養成施設等の適正な運営」のために作成している「自己点検表」に基づき、自己点検を行った。

2. 課題

（1）Web シラバス機能の活用

学修成果評価システムの構築に伴って拡充されるwebシラバス機能について、学科教員の理解を深めるとともに、その有効な活用について検討・実施を進めていく必要がある。

（2）教員間の情報共有のあり方について

学科の教務に関する様々な情報については、教員間が情報を共有し、必要な時にすぐに閲覧・利用できることが望ましい。現在、業務担当者のみが保存しているデータを教員間で共有するためのシステム構築が求められる。同時に、データ共有のリスクを鑑み、必要な利用ルール等を設定することが必要であると考えられる。

(3) 学生への情報提供と履修に対する意識の向上

Web シラバスだけでなく、「講義要項」や「学生生活のしおり」「履修カルテ」など、各種資料を用いて情報提供を行っているものの、学生の履修に対する意識や自ら学ぶ姿勢の高まりに十分つながっていない面がある。まずは、十分に情報の周知を図るため、年度当初のオリエンテーション内容の見直し（学科内のプログラム化、全学プログラムとの調整）を行う必要がある。そのうえで、個々の学生の実態やニーズに応じて、必要な情報提供や相談を行う体制を整えていくことが求められる。

(4) 学習環境の保障

短大の3学科だけでなく大学や高校とも教育施設を共有することが多くあり、一人一人の学生に充実した学習環境を保障するためには、教職員の努力と工夫、連携が必要となっている。特に平成27年度には、E館を中心に大幅な学生数の増加が見込まれることから、ハード・ソフト両面での環境向上に一層の努力が必要となる。

(5) 特色ある保育者養成課程の検討

本学科の特長を最大限に生かした教育内容を示す「特色ある保育者養成課程」の必要性を認識しながらも、なかなか具体的な取組みへと踏み出していない状況である。子ども育成学部との関係も考慮にいれながら、「感性」「表現」といったキーワードを軸に、具体的な特色づくりと養成課程への体系化に取り組んでいくことが引き続き重要となる。

3-① 保育実習 I - 1

担当 [梅本、橋本]

1. 現状

(1) 実習計画と履修状況 [別紙資料]

保育士資格取得希望者の必修選択科目として、1年生 83 名が履修した。

(2) 麻疹等小児期ウイルス感染症への対応について

平成 20 年度より、富山市から富山県保育実習連絡協議会を通じて、実習の際に細菌検査結果とともに麻疹の抗体価測定血液検査結果の提示が求められている。本年度も富山市内で実習を行う学生には「実習生の健康状態についてのお知らせ」を添えて、入学時健康診断による「麻疹抗体価測定血液検査結果票（写し）」を持参させた。

(3) 保育実習 I - 1 実習懇談会の開催

平成 26 年 12 月 2 日（火）午後 3 時から 4 時 40 分、富山短期大学 E 館会議室で実施した。今回の実習受け入れ先より 11 名の出席があった。配布資料に基づいた概況説明のうち、出席者より実習にかかわる感想、意見、要望をいただいた。出席者は、実習生の様子から気づいたことを話し、それについての学校側の事前・事後指導の実際を説明しながら、より充実した保育実習のあり方について、共に考える有意義な機会となった。

2. 課題

(1) 健康上配慮が必要な場合について

今回の実習にあたり、健康上配慮が必要な学生に関して、実習受け入れ側と実習個別指導担当者間で、必要な情報の共有や発作が起こった時の対応について具体的な説明を行った。そして、実習期間中は個別担当が複数回の訪問をし、状況の確認を行った。このように今後も実習にあたり、健康上配慮が必要な学生について事前に保健室看護師との間で確認をし、適切な指導や実習の進め方について科内で十分に検討する必要がある。軽度の疾患で自己管理ができていない者についても、事前・事後指導の際に、健康上の留意事項について改めて本人に確認するようにしていきたい。

(2) 事前・事後指導の充実

記録の作成などに関して、実習先からの評価は様々であった。9 月の付属幼稚園での実習経験がいかされており、実習日誌に関しては概ね要点をおさえた記述ができていたようであった。今回の保育実習では指導計画案の作成は課していないが、本人の希望があったり、実習先が適当と認めたりした場合には実施している。近年、部分担任実習を経験する学生が増加傾向にあり、実習事前指導においてもそれをふまえた指導内容の検討が必要である。

また、記録だけでなく保育中においても、正しい言葉を使って話したり書いたりすることができるよう、実習指導や関連の科目等で十分に指導するようにしていきたい。

1. 現状

(1) 実習の状況

1 学年 83 名の学生が第 1 班 (21 施設 51 名)、第 2 班 (14 施設 32 名) に分かれて実習を行った。実習期間中に、実習を欠席した学生があったが、施設との相談で補充実習を行った。また、自家用車を利用する学生の中で、運転免許を取得したばかりの学生もおり、道路からの転落による自損事故が 1 件、追突による物損事故が 1 件あった。実習前は多くの学生が強い不安を感じている様子であったが、ほとんどの学生が前向きに実習に取り組むことができた。

(2) 2 年生からのガイダンスの実施

平成 27 年 1 月 28 日 (水) 4 限に、事前指導の一環として、2 年生からの施設実習ガイダンスを、配属施設別に実施した。学生は、特別講義と事前学習で施設の概要はおおよそ理解していたものの、実際の実習がどのように進められたのか具体的な話を聞くことで、実習及び施設への理解を深め、実習の不安感の軽減、実習への意欲的参加につながった。

2. 課題

(1) 実習施設の受け入れ

富山大学と実習期間が重なるため、担当者間で連絡を取り実習生の配置を決定した。次年度以降も両校間で調整する必要がある。近年、宿泊を伴う実習先が減り、配属が困難となっている。未熟な運転技術、冬期間の通勤である現実を考えれば、配属先施設の再検討を行わざるを得ない。充実した実習活動を経験するためには、生活施設での実習中心であることが望ましいが、一部障害者の通所施設等を含めることの検討が必要である。

(2) 実習に関わる手続きと書類について

一部の施設から実習費 (委託費) 振り込みの可否や支払い方法の選択制に対する要望が出されている。規模の大きい施設からは、日誌等の確認印を施設長まで回すことの難しさと改善策を求められている。保育実習 I-2 は様々な施設で行うため、施設の状況や要望に合わせた方法を検討しなければならない。

(3) 事前・事後指導の充実

施設ごとの 2 年生からの報告や助言は、細かい注意事項や配慮等が丁寧に伝えられていて効果的であった。特別講義は、施設現場の方の話を聞き、施設における保育士の役割の理解が促進された。学内でのインフルエンザ予防接種を推奨し、予防意識を高める必要がある。また、交通安全についての指導を徹底するため、事前指導の内容に加えることも考える必要がある。事前・事後指導を一層充実させるとともに、二年次での関連した学習科目に繋げ、学びに活かされる実習となるよう位置づけて取り組む必要がある。

3－③ 保育実習指導Ⅰ

担当 [梅本、橋本、石動、飯田]

1. 現状

(1) 指導内容の充実

特別講義や施設見学を通して、現場の先生方から学ぶ機会を得たり、グループで課題に取り組んでみたりなど、実習に必要な知識を多様な方法で学ぶことができた。

2年次開講の「保育実習指導Ⅱ・Ⅲ」における学習内容とのつながりを確認し、体系的に学ぶことができるよう、担当者間で指導内容の共通理解を図った。

(2) 実習報告会の実施

①保育所実習の体験報告会

保育実習をひと通り経験した2年生が、1年生に対して自らの実習体験を通して学んだことを伝え、1年生の疑問・質問にこたえるなどの体験報告の機会を設けた。実施にあたっては、地域別の小グループを構成し、実習に直接活かせる情報が得られるよう配慮した。また、2年生が保育者論の授業で作成した「実習ガイドブック」が1年生へ配布され、実習生の視点からの情報が提供された。

②施設実習の体験報告会

施設ごとにグループを構成し、1年生と2年生が施設実習について語り合う機会を設けた。1年生にとっては、初めての施設実習に対する不安感を解消し、意欲をもって実習に臨めるきっかけとなった。

2. 課題

(1) 指導内容の充実

実習先によっては指導案が求められ、内容の不十分さが指摘された。教育実習Ⅰと連携しながら、日誌と指導案の書き方についての丁寧な指導が必要である。これについては、後期に入り実習直前に、もう一度確認できるような時間の配分が必要である。

(2) 実習提出物及び事前事後指導

実習の提出物(日誌・レポート)の遅延及び事前事後報告の欠席における評価の規定の見直しを昨年度行なったが、学生への周知徹底で、さらなる主体的な行動と判断を促していきたい。特に、学生によっては事前事後報告時での書類の作成不備がみられ、指導が必要である。

(3) 実習中の体調管理

実習中に体調を崩して欠席し、後日追加実習を行う学生が複数名いた。実習前及び実習中の健康管理について指導し、自己管理ができるよう促したい。

3-④ 保育実習Ⅱ・保育実習指導Ⅱ 担当 [橋本、梅本]

3. 現状

(1) 実習計画と履修状況 [別紙資料①]

保育士資格取得希望者の必修選択科目として、2年生 84 名が履修した。

(2) 麻疹等小児期ウイルス感染症への対応について

富山市から富山県保育実習連絡協議会を通じて、実習の際に細菌検査結果とともに麻疹の抗体価測定血液検査結果の提示が求められている。富山市内で実習を行う学生には「実習生の健康状態についてのお知らせ」「細菌検査結果票」及び入学時健康診断による「麻疹抗体価測定血液検査結果票」(写し)を持参させた。

(3) 事前・事後指導

「保育実習Ⅱ」の事前事後指導としての「保育実習指導Ⅱ」と「教育実習Ⅱ」の事前指導としての「教育実習指導」が2年前期に開講された。それぞれ担当教員は異なるが、指導内容では共通する部分が多い。そのため、それぞれの実習指導担当教員間で指導内容の共通理解を図り、テキストなどを活用しながらつながりを持った指導の展開を試みた。事前指導の内容としては、現場講師の特別講義「指導計画について」、実習記録の書き方、指導計画の作成、教材研究を課題とした。指導計画の作成では、学生が作成した指導案を実習担当教員が分担して添削するなど、個別に指導する機会を取り入れた。

4. 課題

(1) 事前・事後指導内容について

保育実習指導Ⅱにおける事前指導では、一斉指導だけでなく、個人で取り組む課題を設定して進めたところ、授業姿勢や習熟度に個人差があるようだった。また3歳以上児対象の実習事前事後指導としての「教育実習指導」「保育実習指導Ⅱ」担当教員が、相互に指導内容についての連携を図っている。今後も連携を図り、複数の担当教員による細やかな指導ができるよう努めたい。

事後指導では、事後報告や自己評価で実習を振り返り、そこから今後の自己課題を導き出す過程を指導した。また、実習先の評価をふまえた個別懇談を希望する学生に対して実施したが、希望しない学生の中には指導が必要と思われる学生が含まれることがある。なるべく、個別担当教員への報告の機会に指導を行い、実習担当教員と情報を共有しながら、次の実習事前準備に有効に活かせるよう指導していくことが必要である。

(2) 実習配属について

実習連絡協議会へ年度始めすぐに名簿を提出し、各市町村へ実習生の配属について4月下旬ごろの回答を依頼しているため、本学では5月の連休明けごろの配属先発表となる。時間的にゆとりがない中の作業ではあるが、名簿や配属先の確認を徹底する。また、県外で実習予定の学生には、前年度春の休業期間中の帰省時等で実習の内諾を得る必要がある。

3-⑤ 保育実習Ⅲ・保育実習指導Ⅲ

担当 [石動・飯田]

1. 現状

(1) 実習の状況

今年度の履修者は3名で、以下の3施設で実習を行った。

(宿泊3名)

- ・児童養護施設（富山市立愛育園、高岡愛育園）

今年度の履修者は、全員が児童養護施設での実習となったため、事前学習（施設に関するテーマを決め、調べた結果を発表するもの）等で、互いに学びを深め合うことができた。また、自らの進路について慎重に検討したうえでの実習選択だったため、実習中での体験が、施設職員としての適性をみきわめ、就職先を選択するうえで大きく役立ったようである。

2. 課題

(1) 実習施設の選定について

保育実習Ⅱ（保育所）との選択実習であるが、履修者数は過去6年で、以下のように推移している。

年度	H21年度	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度
人数	3名	5名	11名	9名	7名	9名

ヒアリング参加者は10人前後となってきている。多くが選択を迷っており、一人一人と話をすることで、施設での実習意欲を確認しながら履修の決定を行うようにしている。ヒアリング参加学生は、施設職員の役割に魅かれ就職も考慮に入れている者や、自分の視野を広げ新たな学びを深めようとする者がほとんどである。しかし一方で、保育所での実習を回避したいという学生もみられた。結果的に、単位実習ではなく自主実習で施設を選択した学生もいる。一人一人の実習が充実したものとなるように、丁寧な個別対応が不可欠である。

(2) 事前・事後指導の内容について

今年度は、実習先施設の種別が共通していたが、実習先が多岐にわたる場合の事前事後指導内容については、継続的な検討課題である。実習Ⅲ履修者は、施設保育士（職員）としての専門的視点・実践が求められる一方で、日誌及び指導案作成などの基本的な保育技術の習得も必要だと考える。また、実習Ⅲ履修者はほとんどが、9月の教育実習を経験する。このため、保育実習指導Ⅱ（保育所）との合同講義を実施し、教育実習指導との連携をはかりながら、一方では施設の仕事や施設職員の役割に関して、十分な学びができるよう配慮することが重要である。

5. 現状

別添の授業計画に沿って実習と事前・事後指導（反省会）等を行った。1年次の前期には前半に観察実習を4サイクル行い、その後、講義と並行して参加実習を行った。9月には、4日間ずつの部分担任実習を行った。5月の観察実習に入る前に、幼稚園の概要について知り、自分の課題を明確にするなどの本実習の意義について、4月中に説明を行った。また、「実習日誌の書き方」のテキストを用いて基本的な部分について講義を実施した。入学直後に園児や実践の場に関わることで、保育者をめざすことへの動機づけにもつながったと思われる。

(1) 観察・参加実習（1年前期前半 5月13日～6月19日）

学生数は83名、配属される保育室は5クラスとなった。1クラスにつき学生数8～9名になるようにグループ分けし、観察実習を行った。参加実習では、1クラスに4名～5名配属されるようにグループ分けして、1班が実習中には別の班は学内で講義を行うなど、実践と並行して知識・技能の獲得を目指した。さらに、参加実習を終えた段階で反省会を行い、学生自身の自覚を促した。

(2) 部分担任実習（1年前期後半 9月3日～9月26日）

部分担任実習に向け、実習内容を考慮した指導案の書き方指導を行った。前年度からは、学外実習における指導案とのギャップを少しでもなくすため、これまでの生活に関わる内容の部分担任ではなく、実習生が園児の前で行う「手遊び」をテーマに設定した。そのため、指導案の書き方指導もそこに照準を合わせて行った。その際、付属幼稚園と協議の上で内容設定を行い、連携して進めることができた。幼稚園からは、「手遊び」がテーマになったことで、実習生が来るたびに新しい遊びを紹介してくれ、園児が家でも再現するほど楽しんでいるなど、おおむね肯定的な意見が多かった。ただし、今の学生はweb上の動画から学んでいることも多く、毎回音程が違ったり、メンバー内でズレがあったりするので、グループ内で統一する、楽譜をきちんと確認するなどが必要である。

部分担任実習では1クラスにつき1日4名～5名配属されるように、学生をグループ分けした。学生は、学内であらかじめ1人1枚ずつ作成した指導案を持って9月の実習に臨んだ。全日程終了後9/29の登校日に、「実習反省会」として、4日間の実践を踏まえた上で、各自の指導案を改めて丁寧に仕上げ、省察した。

6. 課題

実習中、無断欠席や遅刻等はなかったものの、日誌を決められた期日に提出できない学生が2名いた。この2名については、幼稚園からの実習評価において、4項目のうち2項目について「不可」という結果であった。前年度のように、単位不認定ということはなかったが、付属幼稚園での実習において「不可」がつくという指導体制について、実習担当教員のみならず、他の学科教員や幼稚園との連携を図り、評価の基準等について、共通理解していく必要がある。

3-⑦ 教育実習Ⅱ

担当 [中山・難波]

3. 現状

(3) 実習計画と履修状況

平成26年9月17日(水)～10月1日(水)、2年生84名が県内49箇所の幼稚園で10日間の実習を行った。1年次に実習を希望していた3名は、教育実習Ⅱを履修しなかった。

(4) 実習園の調整・確保

9月前半に2大学が3週間、学外での教育実習を行い、9月後半に実施する本学と実習期間が重なることから、県内3校で連絡を取り各校で事前に調査した実習希望数を基に、富山市内公立幼稚園は3校で、その他の県内幼稚園は国際大と富山短大の2校で園に受け入れ可能学生数を伺い調整した。2月～4月初旬の期間に学生が直接出向き、内諾書を得る方法で行ったが、教員が電話で問い合わせた段階では、受け入れの意向を示した園が後日受け入れを断るケースがあり、再度3校と幼稚園で連絡を取り合い調整した。

4. 課題

(1) 他校との連携と調整及び受け入れ先の確保

9月に実習を行う3校で今年度も調査協力を行い実習先の調整をしたが、県外に進学している実習生の受け入れや行事との重なりを理由に断られるケースも少なくなかった。少子化や幼稚園離れが進み、閉園する園が増えてきている。富山市ではこども園に移行している園もあるが、公立幼稚園が少なく、養成校が経営する園が多い高岡・射水地区や幼稚園が非常に少ない魚津市・黒部市・下新川地区については、さらに配属調整が難しくなっている。富山国際大の実習生数が増加していることや、平成27年度入学予定の本学学生が多いため、早急に対策を検討する必要がある。

(2) 実習の実施期間と学生の意欲

9月後半に運動会を行う園が多く、多忙な状況での実習生の受け入れは、部分実習や全日実習を実施する時間を確保することが難しい反面、行事の運営や準備、練習を体験できることの良さがある。実習より先に私立幼稚園適性検査が実施されることや公立保育所の採用予定者数が多いことで、今年度も私立幼稚園に応募する学生が少なかった。夏期休業中の後半であり、就職が内定している学生や実習中に公務員や民間の採用試験を受ける学生がおり、保育実習Ⅱ・Ⅲよりも教育実習Ⅱに対する学習意欲や準備が十分とは言い難い学生が少なくない。

県内の養成校や学生数が増加しており実習期間の変更は困難かと思われるが、課題(1)を含め、実施時期の変更や見直し等に取り組み、保育実習Ⅱ・Ⅲの学びと関連させながら計画を立て、充実した経験となるように努めなければならない。

7. 現状

2年次の通年科目（実習・1単位）として実施。授業の第1回から4回の4コマ分は、付属みどり野幼稚園にて、「入園準備1日実習」として実施。園児は春休み中の為、登園していないが、幼稚園の各クラス担任の指示のもと、新クラスの受け入れ準備や、園庭の環境整備などを行う、毎年恒例の貴重な機会となっている。

本来は「教育実習ⅠおよびⅡの事前・事後指導」の授業であるが、平成24年度より6月の保育実習Ⅱ・Ⅲを控えた前期については、「保育実習指導Ⅱ・Ⅲ」と連動して、実習日誌と指導案の書き方について多くの時間を充てている。

実習日誌については、一日の流れを項目に分けて書く「流れ記録タイプ」と、子どもや保育者の姿をありのまま捉えて書く「エピソード記録タイプ」があることを伝え、保育者のねらいや援助について着目することに重点をおいた。そうすることで、指導案作成に向けての情報が得られやすくなったと思われる。さらに、より保育者の配慮点についてのイメージを高められるよう、「紙皿のコマ」などの遊べる手作りおもちゃ製作を「造形表現Ⅱ」で行い、学生が自分の作品を手にした状態で、「教育実習指導」の時間内に、指導案作成に取り組んだ。この取り組みによって、学生が苦手とする「ねらい」と「内容」のとりえ方や、「予想される子どもの活動」に対する保育者の援助や配慮について何をどのように記入していけばよいか、“デザイン”しやすくなったものと思われる。

後期は専ら「教育実習Ⅱ」の事後指導として、自己評価・実習園からの評価を知る・課題の把握・課題解決の時間に充て、最終回には自己課題として取り組んだパネルシアターの作品などの発表を行った。

8. 課題

指導案の活動内容やねらいの具体化

指導案については、少しでも学生がイメージしやすいよう、わかり易いテキストを活用したり、造形表現の授業とつなげたりと工夫はしているものの、各々の学生が配属された実習先の担当クラスの年齢や子どもの実態に合わせた活動内容、それに対する「ねらい」の具体化が、まだまだ難しいようである。

また、学生から「全日実習の指導案の書き方について、もっと深く学びたかった」という意見もあった。

後期、「教育実習Ⅱ」を終えての自己課題解決に向けての取り組みでは、学生の主体的13な学びのスタイルを尊重しつつも、取り組みの姿勢に温度差が感じられることも事実である。後期は全ての実習を終えており、特に、就職先も内定した学生は、緊張感が薄れてくる時期でもあるので、この授業時間を有効に使い、例えば付属みどり野幼稚園の保育終了後、15時頃から在園児親子を対象に、A館旧学生ホールで学生が主体となって「親子ふれ合い遊び」などが展開できないかなど、新たな内容の深まりについて検討していきたい。

5. 現状

(5) 富山県保育実習連絡協議会報告

平成 26 年 12 月 9 日（火）午後 2 時から 4 時、事務担当校の高岡第一学園幼稚園教諭・保育士養成所において、県内保育士養成校 6 校が会し、平成 27 年度実習日程の調整及び保育士養成に関わる現状と課題等について協議した。その他の協議事項としては、実習時間の実習園への周知の必要性、市町村保育士採用試験の合否発表までの期間の短縮化と面接内容の改善、実習連絡協議会への関係機関・団体等の出席依頼等について話しあわれた。また、健康上配慮の必要な学生の実習に関する指導及び配属先との連携、委託費を受け取らない実習先への対応について情報交換が行われた。

2. 課題

(1) 他校との連携と調整について

〈保育実習Ⅰ-2：富山大学〉〈保育実習Ⅲ：富山福祉短期大学〉〈教育実習Ⅱ：富山大学・富山国際大学〉の 3 実習が他校の実習期間と重なっている。施設や幼稚園での実習は受け入れ可能人数が限られているため、保育実習Ⅲ以外は事前に各校の担当者間で調整を行っている。保育実習Ⅲは希望者数が少ないため本人の希望を優先し、担当者が施設に直接連絡を取って調整しているが、県内の養成校に在籍する学生が増加しているため、学生の希望通りの施設で実習することができないケースも出てきている。特に教育実習Ⅱは 3 校同時に 140 名以上の学生が県内で実習を行う期間があり、今後も園の減少が続く場合は調整することが難しくなることも考えられる。時期の変更も視野に入れて、再度検討することが問われている。

(2) 保育実習連絡協議会の今後について

連絡協議会では実習時間について再度協議された。実時間でカウントするように統一されつつあるという情報を得たが、養成校すべてが 90 時間で統一することは現段階としては難しい。実習先から問い合わせがあった場合は、各校で経緯をその都度説明することとなった。市町村保育士の採用試験の試験期間の短縮化については、事務局校と前任校で引き続き申し入れを行うこととなった。実習連絡協議会への関係機関・団体の参加については、実習連絡協議会としての実習の打ち合わせと、相手を招いて話を聞くことを分けて考えた方が良く、また謝礼金、交通費等実現に向けては課題があり、結論が出なかった。平成 28 年度事務担当校である本校に検討課題として申し送られることになった。この点に関しては、学科全教員が情報を共有し、意見交換、検討する機会を持つことが必要である。

(3) 幼保連携型認定こども園での実習について

幼稚園数の不足から幼保連携型認定こども園を幼稚園実習先として確保することが予想される。保育実習Ⅱの実習先として重複しないように配慮する必要がある。

3-⑩ 自主実習

担当 [中山]

9. 現状

(1) 事前・事後指導

5月下旬のオリエンテーションでは、保育や施設の理解を深める体験学習であり、夏期休業期間を有意義に過ごすための貴重な機会として、自主実習参加を学生に奨励した。学生自身が実習希望先と連絡を取り内諾を得た後、7月中旬までに書類と検便を提出した。新たに「事前・事後の流れ」「配慮・注意事項」「事後報告書」「礼状の記入例」等の資料を作成し、参加学生に配布した。実習報告書の提出状況は良好であった。

(2) 実習状況

			1年 (昨年度)		2年 (昨年度)		計 (昨年度)	
在籍数			83	86	87	89	170	175
実習者数			80	83	37	21	117	104
実習件数	公立	保育所	13	12	0	1	13	13
		こども園	6	0	0	0	6	0
		幼稚園	4	0	0	0	4	0
		施設	0	1	2	0	2	1
	私立	保育所	38	61	55	19	93	80
		こども園	6	0	0	0	6	0
		幼稚園	17	12	2	1	19	13
		施設	0	0	0	1	0	1
	計		84	86	59	22	143	108

〈1年生〉実習参加率は変わらないが、実習先は私立保育所が減少し、幼稚園やこども園が増加した。〈2年生〉実習参加率、件数ともに増加した。

10. 課題

(1) 実習期間の設定

9月は教育実習Ⅰ、Ⅱが組み込まれている。追・再試験も行われるため、学生には自主実習を前期補講終了後、8月の休業期間中に実施することを奨励している。今年度は私立幼稚園での実習を希望する1年生が多く、園の希望で9月に参加することが少なくなかった。教育実習Ⅰの事前見学や日誌提出日と自主実習の日が重なるトラブルが起きることもあった。事前指導で日程確認を十分に行い、無理のないスケジュールで取り組むことを徹底させたい。

(2) 実習期間の確保と実習の捉え方

2年生は、8月10日過ぎから夏期休業に入る。9月半ばから教育実習Ⅱが始まる上、就職活動や採用試験に向けた学習のため、近年は自主実習に参加する学生数が少ない。今年度参加者が増えた理由として、「就職先を検討・比較・絞り込むための実習」と捉える傾向が強かった。短期間(3日間)に複数園で実習する学生もいる。各自の就職先に対する情報や自身の希望を整理して、無理のない実習計画を立てることが必要だと思われる。

4 総合演習

担当 [梅本、望月]

1 1. 現状

(1) 各研究分野への配属と研究・調査の実態

班編成 8 分野、9 名の専任教員が担当した。各教員の担当学生数は 8～11 名であり、班編成は全体で 24 班となった（昨年度：25 班）。

(2) 中間発表会

大学祭の学科企画としての中間発表会では、各班がポスターで調査研究の全体像を効果的に表す工夫を重ね、集積した情報を整理することで今後の調査や考察に関する見通しを立てることができた。来場者にはアンケートを実施し、1 年生には中間発表を見ての感想レポート提出を課し、来年度の総合演習へ向けての動機づけとした。

(3) 『総合演習第 38 集』について

原稿作成について 1 班あたり調査系の研究は 8 頁、実技・製作系の場合は 5 頁とした。指導教員の指導確認を受けた後、印刷した原稿とそのデータを保存した USB メモリを提出することとした。

記録集の学外施設への事前配布については、県内保育士養成校、幼児教育研究会後援団体、県厚生部、県経営管理部文書学術課に送付した。さらに、各班の調査協力施設（者）には、発表会終了後、学生自らがお礼と報告に伺い、記録集を手渡すよう指導した（一部郵送あり）。

(4) 総合演習発表会

E 館 7 階で 2 会場にわかれて、各会場ですべての分野の発表が行われるようにプログラムを構成した。リハーサル及び当日の運営は、運営スタッフが中心となって行った。プレゼンテーションは、スライドを用いる班が多く、その他実演を行う班もあった。外部からは、富山国際大学子ども育成学部教員 3 名の参加があった。また、富山新聞社による取材が 1 件あった。

1 2. 課題

(1) 記録集・発表会の充実

自らの発表にはていねいに取り組むが、質疑応答への参加が消極的であった。一人一人が主体的に参加できるようなわかりやすい発表と運営の工夫が必要である。記録集の総頁数、発行部数は実態に即して見直す必要がある。

(2) 学習環境の充実

学科用ノート PC が増設され、論文原稿や発表会資料作成時期に活用された。原稿や発表資料の作成だけでなく、文献検索やデータの解析等でも有効活用していきたい。

13. 現状

(1) 授業の概要

授業の状況は、別紙資料の通り。[別紙資料]

保育士・幼稚園教諭が身につけることの必要な「4つの資質能力」(①使命感・責任感・教育的愛情と感性、② 社会性・対人関係能力、③ 乳幼児理解やクラス運営、④ 保育内容の指導力)を4クールとして、1クールにつき現職の保育者1～2名を講師として招き、講話をいただいた。

(2) 授業の進め方

昨年度同様に、外部講師による講話、担当教員からの課題設定をもとに、グループ討議を行い、話し合っただけの内容を、資料提示して発表するという流れで、4クール実施した。グループ討論、発表資料づくりのプロセスでは、複数の担当教員がアドバイスを

たり、発表後にコメントや補足説明を行ったりした。また今年度は、具体的な課題設定(指導計画、環境図など)によって、グループ討論による学びが実践に結びつくような工夫を試みた。1クールごとの学びと自己課題を小レポートとしてまとめ、提出するよう求めたが、一部学生の提出遅れが見られた。

(3) 成績評価の方法

4回分の小レポートの内容及び、授業への参加態度を加味した総合評価とした。

14. 課題

(1) 授業参加態度及び授業の工夫について

グループ討議への参加態度、外部講師の講話を聴く態度等は概ね良好だが、講話の内容を自分自身に引き付けて深く考える態度や、具体的実践をイメージする態度に課題を感じる。昨年度の反省をふまえて、具体的な課題設定や方法の工夫などを行ったほか、テーマについて検討する時間が間延びしないように日程上の配慮も行ったものの、さらなる工夫が必要である。また、講話内容の設定が、討議を深めるという観点では不十分な点もあったので、次年度は改善に努めたい。

発表資料は、発表内容をわかりやすくスライドで表現することとなっており、プレゼンテーションの工夫が必要となる。今年度導入した機器の機能を十分に活用することも含めて、教員による具体的な指導や提示を行っていききたい。

(2) 評価について

これまでの学びをまとめ、個々の育ちを確認する科目であるという性質上、細やかな観点による評価を行いたいところだが、現在はレポート評価が中心となっている。レポートの字数も十分ではなく、多くのレポートが表面的な記述に終始していることが課題である。

今後、評価方法や観点についての検討を行っていくとともに、レポートの文字量や課題設定についても検討を加えていきたい。

(3) 履修カルテの活用について

履修カルテとの関連づけが不十分であり、さらなる活用を検討していききたい。

6 学生指導

担当 [望月、橋本、梅本、飯田]

1. 現状

(1) 休学、退学、復学等について

卒業延期となっていた2年生1名（平成24年4月入学）は、平成26年9月に卒業した。休学、退学、復学等はなかった。

(2) 学業への姿勢

授業中の私語対策として、座席指定を行った。また、各教員は、学生による授業アンケートの結果や学生との教育課程等懇談会での意見を参考にし、授業計画や内容、指導方法等の改善に努めた。2年後期になると、全ての実習を終え、進路内定による気の緩みがあるためか、受講態度や生活習慣の乱れが見られた。こうした理由で学業不振の学生には、担任や教科担当教員を中心に個別指導を実施した。

(3) 健康指導

近年、アレルギー疾患をもつ学生が増加傾向にある。その症状や程度は様々であり、個別的な配慮が必要なケースがあった。発作時の対応として、全学的な協議のもと「緊急時対応マニュアル」が作成され、体育館・教室等必要な箇所に配置された。その他様々な持病を持つ学生が、入学後新しい生活に慣れるまでの間で体調不良に陥ることが多く、保健室看護師との緊密な連携をとりながら学生指導にあたった。

また、軽度な疾患について入学時健康診断等で保健室看護師に申告されておらず、実習指導の際に十分な助言をできないことがあった。

2. 課題

(1) 健康上の留意

アレルギー疾患をはじめ様々な持病で健康上の配慮が必要な学生がいる。特に入学後新しい生活に慣れるまでの間で発作を起こしたり、症状が悪化したりすることが考えられる。入学時健康診断で把握した情報をもとに、できるだけ早く保健室看護師と学科担任や教科担当教員などが連携をとることが求められる。そして、必要な配慮について個別的に検討して適切な対応ができるようにしておくことが必要である。

(2) 学生指導のあり方

基礎学力や自己管理能力が十分とは言い難い学生が目立つようになり、個別相談や指導に費やす時間が増えてきている。これに対し、学科全教員が対応していることから、基本的に担任がその学年の情報を集約できるよう、教員間の連携・情報共有が必要である。

また学生数が前年度と比較して著しく増加する場合、学習環境だけでなく、必要な個別相談や指導が十分に受けられるような受け入れ体制を学科全体で考える必要がある。

7 幼児教育センター活動

担当 [小芝・梅本・石動・難波]

1. 現状

(1) 研究及び広報部門

①第42回幼児教育研究会の開催

日時：平成26年6月21日(土) 9:30-15:30

共催：富山国際大学(子ども育成学部)

主題：保育内容を見つめ直すー子育て支援と保育内容ー

参加者：360名(内訳：一般参加者177名、招待者3名、本学科学生170名、教職員10名)

②機関誌「越の子」の発行

No.68号 2014.6.2発行(A4版 6ページ) 1,100部

[内容] 保育を見つめるシリーズ「子どもと保育者の信頼関係」、
学科教員退任にあたって、新任教員自己紹介 他

No.69号 2014.9.29発行(A4版 20ページ) 1,200部

[内容] 第42回幼児教育研究会記録集

(2) 研究活動の把握と資料収集部門

幼児教育センターの予算で購入した図書資料及び設置場所は次のとおりである。

- ①日本保育学会論文集(E-206 学科事務室)
- ②月刊美育文化(5階ラウンジ)
- ③チャイルドヘルス(5階ラウンジ)
- ④プリプリ(5階ラウンジ)
- ⑤あそびと環境0,1,2歳(5階ラウンジ)
- ⑥新幼児と保育(5階ラウンジ)

(3) 育児相談・保育実践助言指導部門

育児相談は、幼児・児童生徒の保護者から約10件あった。保育実践助言指導は、県・市、県・市保育士会、保育所(単独)での保育実践の助言指導が21件あった(これは、県・市・保育士会・単独保育所の数で、それぞれ助言指導が1回の場合も複数回の場合も、いずれも1件とした)。

2. 課題

内容の充実と参加者確保が重要である。平成27年度開催の第43回研究会で、平成22年度第39回研究からスタートした研究主題「保育内容を見つめ直す」に基づく一連の研究は終了する。今回実施したアンケートの結果を踏まえ、平成28年度第44回以降のテーマ及び内容を精査し、適切な研修形態を選択的に取り入れていくことが必要である。子ども・子育て支援の新制度の実施など、保育をめぐる社会の動きも踏まえながら、平成27年度内に全面的な検討が必要であろう。今後とも、地域と密接につながった研究や社会貢献の取組をより一層充実させることが求められる。